



「拓け未来の新潟 第17回教育フォーラム」を開催しました

令和6年1月26日(金)に「拓け未来の新潟 第17回教育フォーラム」を開催しました。講演会、分科会に320人を超える方から御参加いただきました。

基調講演

演題 「GIGAスクール時代の子どもの学び ～5つの壁を超えて～」

講師 放送大学教授 中川 一史 様

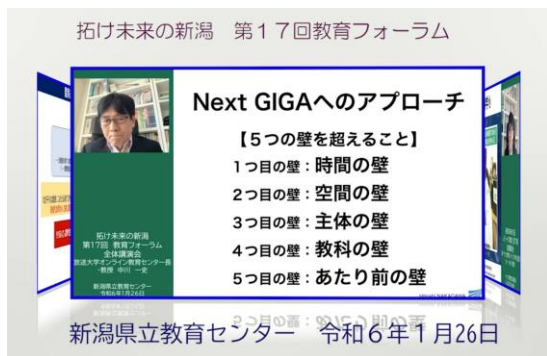


A I時代の教育学会会長や、中央教育審議会初等中等教育分科会特別部会の委員、G I G Aスクール時代のNHK for School活用研究プロジェクトの総括や、高校の情報の教科書の編集委員など、情報教育に関する様々な分野で活躍されている放送大学の中川一史教授から、「G I G Aスクール時代の子どもの学び～5つの壁を超えて～」と題してご講演をいただきました。

講演会では、I C Tを活用することで得られる学びのメリットや活用実践の事例、デジタル教科書の活用や個別最適な学びにおけるI C Tの有用性、S T E A M教育とI C Tの関係など様々な角度からお話していただきました。

講演会参加者の声

1 全体講演会のオープニング画像



GIGAスクール構想の第2フェーズにある中、第3フェーズを見据えたICT活用の重要性を認識できた。本来の求めるべき主体的な子どもの学びの姿をしっかりと持ち、子ども自身が自ら、学びの調整力を高められるように支援していきたい。

2 全体講演会での1コマ。



乗り越える5つの壁に分けてお話しいただき、いずれも日々の授業の中でストーンと落ちることばかりだった。当たり前の壁を乗り越えるには、授業観を進化させていくことが必要だと感じた。タブレットをどのように活用するかについては、子どもが決めていく授業に挑戦していきたい。

5つの壁を一気に越えることは難しいが、1つひとつを考えるとできそうなのが多くあると感じた。時代に合わせた対応ができるように研鑽を積んでいきたい。

平成24年の中教審答申では、道徳教育を実施する上での主な課題として、『効果的な指導方法が分からない』、『指導の効果を把握することが困難である』などが挙げられ、2年後の平成26年10月の中教審答申では、『教師主体から「子ども主体」へ』、『道徳的事象を「自分事」と捉える』など、「考え、議論する道徳」への転換が提言されました。しかし、令和3年に文部科学省が実施した道徳教育実施状況調査における設問「道徳科の授業を実施する上での課題」では、話し合いや議論などを通じて、考えを深めるための指導や道徳的価値の理解を自分との関わりで深めるための指導などが依然として課題であることが明らかになっています。

このような経緯を踏まえ、今年度の道徳教育プロジェクトチームは、県内の小中学校4校に協力していただき、改めて「道徳科の授業を展開する上での課題」などについて、アンケート調査を実施しました。調査では、半数以上の先生方が、「効果的な指導の方法が分からない」、「指導の効果を把握することが困難である」ことが課題であると回答しています。

そこで、本分科会では「誰もが取り組みたくなる道徳科の授業づくり」をテーマとしました。当センター主催の研修受講者4名と連携しながら、現状を改善し、課題解決の一助となるような授業について研究し、授業実践の様子をとおして、児童生徒の実態に沿った効果的な手立てなどの成果を発表しました。

以下は、授業実践した4人の先生の「授業づくりの工夫」です。

- 子ども主体の授業を目指し、子どもの思考の事前把握と補助発問の工夫
- 発達段階に応じた思考を深めるための役割演技の工夫
- 二項対立の物事を扱い、本音を引き出す工夫
- 自己表現を苦手とする生徒をスムーズな話し合いに導く工夫

これらの工夫を参考に、今後の道徳科の授業づくりに活用してください。

授業実践の様子



【実践協力校】

- ・小千谷市立小千谷小学校
- ・村上市立朝日みどり小学校
- ・胎内市立きのと小学校
- ・十日町市立中里中学校

参加者の感想

考え、議論する道徳をめざし、児童生徒の自分事としての捉えを重視された実践を学ぶことができ、効果的な方策をご紹介いただくことで、道徳科の授業改善のポイントがとてもよく分かりました。



児童生徒の心を豊かにし、自ら考えを深めていく力を育成するためには、学校全体で、全教職員が一体となって、道徳教育に取り組んでいかなければならないと、改めて感じました。



テーマ設定が現場の先生方にとって必要感があり、取り入れたら有効性のある内容で、とても素晴らしいと思いました。



アントレプレナーシップ教育が、公的な政策課題として掲げられたのは平成9年のことです。現在、このアントレプレナーシップ教育が注目を集めていますが、それは、変化の激しい時代において、主体性をもって社会課題に挑む人材を育成することが必要になっているためです。「アントレプレナー」は「起業家」と訳されますが、「アントレプレナーシップ教育」は「起業家」そのものだけではなく、「起業家の精神、資質・能力」の育成を目指すものです。県教育委員会は、アントレプレナーシップ教育を「様々な社会変化の中で、主体性をもって課題に挑む人材を育成する教育」と定義し、児童生徒の興味・関心や問題意識等を出発点として、探究的な学びのプロセスにより、地域課題や自分自身のやりたいこと等を見つけ、社会との関わりをもちながら解決等に向け取り組む学びを推進しています。しかし、アントレプレナーシップ教育については、まだ認知度が高いとはいえないことや、実施する上で様々な困難が伴うなどの課題もあります。

このことを踏まえ、今年度、キャリア教育プロジェクトチームは、「アントレプレナーシップ教育の基礎的理解」をテーマに設定して、調査・研究を進めてきました。分科会では、当センターの『夢☆チャレンジ』講師派遣事業を利用して若手起業家の講演を実施した小学校3校、義務教育課のアントレプレナーシップ教育推進モデル事業の先行モデル校1校、高等学校教育課のアントレプレナーシップ教育スタートアップ事業の研究指定校2校に協力を依頼して、その取組を紹介しました。

【取組のポイント】

- 若手起業家の講演を通して、諦めない心や挑戦する気持ちなどを醸成
- 「活動内容そのもの」から、活動を通じて「育成する力」へと視点を転換
- 社会との関わりを持ちながら、探究的な学びのプロセスにより生徒の主体性を育成

各校における取組の様子



【上越市立明治小学校】



【長岡市立柿小学校】



【糸魚川市立田沢小学校】



【県立加茂高等学校】



【胎内市立中条中学校】



【県立長岡商業高等学校】

参加者の感想



実践校での発表がとても具体的で理解を深めることができました。これからは生きる子どもたちには必須の力だと感じました。できるところから、総合的な学習の時間、キャリア教育に生かしていこうと思います。



アントレプレナーシップ教育は、教師がつけたい力を明確に持ち、どのような探究的な活動を展開していくかが大切であることがわかりました。



子どもたちが与えられた内容を受動的に学んでいる現状を打開するためにも、地域にある材料を生かして主体的学びを促したいと思いました。

